## 東山文化表す二層楼閣

# 国際文化学部鹿毛敏夫教授編

# 執筆者 16 名の力作『戦国大名大友氏の館と権力』が掲載

●大分合同新聞朝刊　2018 年 11 月 10 日(土) / 11 月 15 日(木)

2018 年 11 月 10 日（土）

「戦国大名大友氏の館と権力」
第1部 戦国大名居館論

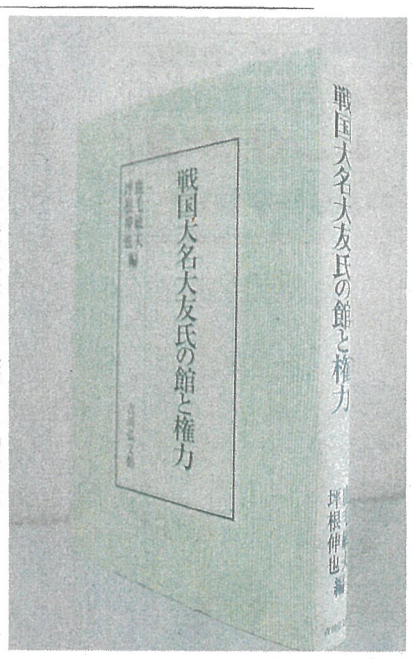
随時掲載

## 発掘20年の成果　論文集発行

大分市顕徳町で戦国大名大友氏の館の遺構が発見されて、20年がたちました。この節目の年を意識して、文献史学と考古学を専攻する全国の研究者が、これまでの発掘調査の軌跡と大友氏の権力構造解明に関する学際的研究の到達点を大名居館論、権力論、領国論の三つの論点から検討した論文集「戦国大名大友氏の館と権力」を共同執筆しました。

書籍（A5判、342ページ）は、老舗出版社「吉川弘文館」（東京都文京区）が発行して全国で販売が始まりました。また、優れた学術書と評価され、日本学術振興会の科学研究費補助金の採択を受けました。

中世という時代（13～16世紀）に、積極的に海外との交易を行い、繁栄を極めた大友氏の実像がどこまで明らかになったのか。全国が注目する「大友時代」について最新の研究成果を執筆者16人のリレーで紹介します。



全国の研究者が共同執筆した「戦国大名大友氏の館と権力」（吉川弘文館）

### 第1章「守護大名大友親繁の館」

## 東山文化表す二層楼閣

豊後府内の大友氏館は、どのような構造だったのでしょうか。戦国期（16世紀）の実態は随分と明らかになってきましたが、守護大名期（15世紀）については、ほとんど解明されていません。

そもそも、守護大名期の代表的な当主である大友親繁の下、その治世当初の15世紀半ばまでの館は、かやぶき・竹敷きの質素な邸宅として、その純朴さが京都の五山僧にまで知れ渡っていました。その後、南北朝時代以来7代・100年にわたって続く両統迭立による不安定な家督相続慣例を脱した親繁は、文明8（1476）年4月に家督を直系嫡男の政親に継承させることに成功します。時に政権円熟期を迎えていた親繁は、この「御一家御祝儀」を機に、政親名義の新しい守護大名館の建設に取り掛かりました。

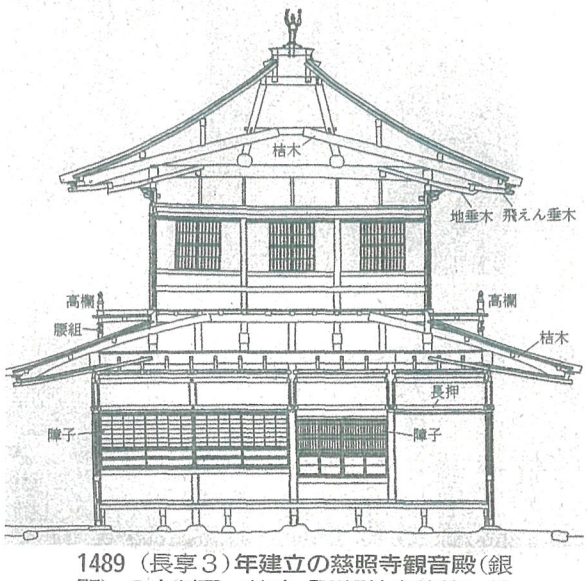
注目されるのは、大友家の惣大工寿彭が記した「木砕之注文」という木割書の記述です。「御屋形御主殿御二皆作」「御二皆ノ御主殿寸」の表現から、同年に親繁・政親父子が建てたこの主殿が「御二皆作」（2階建て）だったと分かるのです。

15世紀後半の守護大名館の主殿が2階建てだった前例はありません。しかしながら、大友親繁・政親父子が莫大な進物を贈って密接な関係を維持した前将軍足利義政の手になる二層構造建築物、京都の慈照寺観音殿（銀閣）の上棟が長享3（1489）年で、大友館主殿上棟の13年後に当たります。親繁の館は、床面は「板敷」で、「しやうし（障子）さい立」（敷居の溝の両縁に「さい」＝付樋端＝と呼ぶ細木を作り付けて明障子をはめ込んだ仕組み）の間仕切りを有した構造です。東山文化の書院造りの様式を取り込む二層楼閣建築として、のちの銀閣に先立って建立されたと推測することもできるでしょう。

無論、その造営を可能としたのは、領内産出の硫黄鉱石資源を輸出原資として遣明船貿易を手掛け、幕府中枢に610貫文もの献上をしても余りある中国銭を保有していた大友親繁の莫大な財力に他なりません。

「木砕之注文」が証する文明8年の大名館主殿の二層楼閣普請は、この政権円熟期を迎えた65歳の親繁から32歳の嫡男政親への家督継承を寿ぐ「御一家御祝儀」として催行された造営事業です。それは日明貿易で得た潤沢な資産を背景に東山文化の建築様式を具現化する守護大名館の建設だったとも言えるのです。

（鹿毛敏夫・名古屋学院大学教授）



1489（長享3）年建立の慈照寺観音殿（銀閣）の木割図＝鶉功『図解社寺建築』社寺図例編（オーム社、2016年）から

文化 ぶんか

2018 年 11 月 15 日（木）

東西南北

2018.11.15

「府内絵図」裏付ける庭園

―との見出しが躍った。1998年11月6日、大友氏の館跡発見をいち早く報じた本紙である。それから今年で20年

▼大分市顕徳町の現地は国史跡に指定され、現在、市が歴史公園として整備を始めた。大規模な庭園を復元し、中心建物や隣接の唐人屋敷も建設する予定の長期計画だ▼ここに至る道のりは平たんでなかった。JR大分駅南区画整理事業の代替地として発掘が始まり、ともすれば破壊される危機にあった。東南アジアから輸入された陶磁器が事業にからみ発見された事実も当初は伏せられていた▼その後、故・賀川光夫別府大学名誉教授らの努力で文化庁が動き、史跡指定と土地公有化が始まった。市中心部に近い場所での大規模な家屋立ち退きは全国的にも珍しく、用地交渉は時間を要した▼館は今から400年以上前の大友宗麟と息子・義統の時代で、敷地は約200トン四方。周辺の町並みも県が道路整備事業に伴い発掘し、館を囲む中世・府内の様子が分かってきた▼発掘とともに文献調査も進んだ。そして館研究20年の集大成がこのほど「戦国大名大友氏の館と権力」（鹿毛敏夫・坪根伸也編）として刊行された。執筆者16人の力作である▼宗麟時代は栄華を極めた一方、その後滅びたことや、キリスト教との関係でゆがんだ姿が伝えられるなど不幸な歴史を刻んできた。一歩でも実像に近づくことを期待したい。